

第10分科会

幼児教育と小学校教育の接続

幼稚園において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるような接続の在り方について考えましょう

ディレクター名	村松 恵子 (こども広場あんり)
司会者名	田村 都弥 (追分幼稚園)
運営委員名	荒川 慈文 (認定こども園 新田塚幼稚園)
話題提供者園名	佐々木 快典 (智光幼稚園)
	本間 規子 (子育てセンターひだまり)
助言者名	永倉 みゆき (静岡県立大学 短期大学部 教授)
分科会担当責任者名	吉川 里佳 (さみどり認定こども園)
会場	富山国際会議場
参加人数	84名

子どもの発達と学びの連続性を確保するためには、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに、幼稚園教諭等と小学校の教師が共に園児の成長を共有することを通して、乳幼児期から児童期への発達の流れを理解することが大切となります。

幼稚園等と一緒に取り組む交流活動や合同研修、交流などを進め乳幼児期の教育及び保育の成果が小学校につながるための工夫や方法について考えてみましょう。

～研究の手がかり～

幼稚園と小学校がそれぞれ指導方法を工夫し、円滑な接続を図るための工夫や方法について考えてみましょう。

話題提供① 佐々木 快典（智光幼稚園）

【掛川市の紹介】

掛川市は日本のほぼ中央に位置し、北は南アルプス最南端から南は遠州灘まで、豊かな自然に恵まれた地域である。お茶作りが盛んであり、平成25年に世界農業遺産に認定される。また報徳のまちでもあり、市内全小学校に二宮金次郎像がある。市内の小学校は22校、中学校は9校ある。

【掛川市 平成25年度より中学校区学園化構想のスタート】

保育園・幼稚園・小学校・中学校の15年間で子どもたちを育成していく視点を持ち、地域ぐるみで子どもたちを育てていくことが目的である。

活動内容

○各中学校区で様々な活動を行っている。本園が所属する「掛東（かけとう）学園」では、全体会（各園・学校での活動の紹介や、講演会・分散会に分かれ地域の方や教職員、園職員等が情報交換やテーマに基づいた意見交換会を行う）挨拶運動・わんわんわん運動（親子の対話を大切にする活動）の推進・公開保育や公開授業（毎年指定園や学校を決め、保護者や地域の方も公開保育や授業を見学する）・交流活動・地域のボランティアを募り、園や学校で能力を発揮していただく活動を行う。

○教職員同士の交流

- ・各学園において、保幼小中の教職員が一緒になって研修を行う。
- ・授業参観やテーマに沿った話し合い等により、教職員同士の資質向上を図っている。

○幼児と小学生の交流

成果等

- ・同じ校区に属する幼児教育施設や小学校や地域の方々にも、幼稚園・保育園を知ってもらうことができるよい機会
- ・反対に小学校等の授業見学では、現在どのような形で学校の授業が行われているかを知るよい機会
- ・卒園児の姿も知ることができる
- ・地域の方や他の施設の方とも情報交換ができるよい機会
- ・地域の方に自園の活動を発信でき、理解や協力をスムーズに求めていくことができる
- ・地域ぐるみでみんな育てるという意識をもつことができる機会

話題提供② 本間 規子（子育てセンターひだまり）

【かけがわ乳幼児教育未来学会】

かけがわ乳幼児教育未来学会概要

学会設立の背景

1. 乳幼児を取り巻く状況

少子高齢化等の社会の変化 ➡ 保育ニーズの高まり・子育てへの不安、
子どもの遊びの機会や豊かな体験の減少

2. 保育・教育制度の状況

保育所と幼稚園という縦分け ➡ 「幼保一元化」への取り組み
認定こども園化への再編、内容と質の充実



3. 教育・保育に携わる者の研究・研修体制

施設の形態による別々の研修 ➡ 再編成により交流と学び合い、高め合い

4. 掛川らしさ

「教育大綱かけがわ」の策定 ➡ かけがわ教育の日・中学校区学園化構想
かけがわお茶の間宣言、協働の街づくり

子どもたちの未来のために、乳幼児に係る保育及び教育の質の向上を目的とした実践研究を展開するとともに、研究者、従事者等の相互の交流および連携を図ることが目的である。

成果等

- ・市内の乳幼児教育に携わる者が同じ研修に集い、同じ方向で乳幼児教育について考えたり、実践できたりするきっかけとなっている。
- ・乳幼児教育に携わる仲間との交流や共通理解を深めることができている。特に規模や形態が違う施設の職員との意見交換ができ、よい刺激となった。
- ・施設によって、それぞれの特性や課題がわかり、各部会での活動が意味のあるものとなっている。
- ・市の担当職員がメンバーに入っていることで課題解決へ向けての意見の共有ができたり、統制を図ったりすることができている。

【話題提供園 2 園からみえてきた掛川市の課題等】

- ・現状の課題 距離・日程調整の難しさ

成長の接続がなされているのか？相互理解（生徒と教員両方）は図られているのか等

- ・特にアプローチカリキュラム・スタートカリキュラムの作成には相互の指導要領を理解することが必要 ➡ 今年度、幼児教育施設の職員と小学校の教員の合同研修会がスタート
- ・今年度の研修詳細

(目的)

講話とグループ討議を通して幼児教育と小学校の教育の円滑な接続の必要性を理解するとともに、アプローチカリキュラム・スタートカリキュラムの作成・充実を図る目的で行われた。

(講話)

講師の先生からは、幼稚園や保育園は“遊びの中で学ぶ”ことを通して様々なことを学んでいること、“ねらい”“目指す子どもの姿”をしっかりと考え活動を行っていることを小学校の先生たちに知ってほしい。幼児期に育まれた力はその人の支えとなって生き続けるものであり、幼児期は根っこを育てる大切な時期であること。子どもは自ら学ぶ力を持っているため、幼稚園・保育園で育てた子どもたちの育ちを小学校につなげていってほしいこととお話いただいた。「そのためには、日頃からの声かけや関わりが大切だが、子どもたちの力が引き出される授業になっているか。」等、小学校の教員に対する投げかけもあった。



(参加者の声)

幼稚園や保育園の活動において、子どもたちの遊びの中にもしっかりとねらいや目的があることや、小学校の学びにつながるように先生方が考えてくれていることを知った等の意見が小学校の教員から聞かれた。

(まとめ)

この研修会を通して、幼稚園・保育園の思いや子どもの活動のねらい等を知ってもらうことができ、とてもよい機会だった。スムーズな接続のために保幼小の連携の大切さを改めて強く感じた。

《質疑応答》

愛知県 広路幼稚園 坂田先生

Q.掛川市中学校区学園化構想は、どういう経緯でスタートして形が整っていったのか。

A.中学校区学園化構想は、掛川市の小学校の校長先生が動いてくださったことから教育委員会が主となって研究が始まった。幼保の横のつながりである「かけがわ乳幼児教育未来学会」は、私立幼稚園が動いたことで出来た。それまでは公立の幼稚園や保育園と情報が共有されることはあまりなかったが、同じ市で子どもを育てていくのだから一つの団体として組織を作りたいという思いから始まった。小規模の園も参加して大きな団体となり、市から補助が出て、講師の先生を呼んで講習会を開くことが出来るようになり、みんな喜んでいる。 (佐々木先生より)

富山県 堀川幼稚園 谷山先生

Q.「掛東学園」の公開保育では、小学校の先生も見に来られるのか。

A.学園化構想の中での公開保育なので、教育関係の方や地域の方など幅広く声をかけている。

Q.園児と小学生の交流活動や、未来学会の合同研修会の頻度は。

A.幼稚園同士の交流は今までは年に一回だったが、プール交流やもちつき会、コンサートやイベントと一緒に参加する等増えてきている。小学生との交流は頻繁には出来ないが、プール活動や授業見学等を通して交流している。プール交流は長く続いており、園児は浮き輪を使ったり園児一人につき6年生が2人ついてくれたりと、安全面にも配慮されている。

未来学会の合同研修会は今年度が初めてだが、ここで話し合った大事なことを各中学校区の学園に伝え、話し合いをより深めていくことも出来ると考えている。 (佐々木先生より)

静岡県 幼保連携型認定こども園 ふじみ幼稚園 山竹先生

Q.ある小学校の先生から、子どもたちがひらがなの書き順を間違えて覚えている子が多いのでなんとか出来ないかと言われたが、幼稚園では子どもの興味に合わせてひらがなを教えているので一斉に教えることは難しい。そういった互いのねらいのズレなどはどうしたらよいか。

A.そういうズレはたくさんあると思うので、それを共通理解した上で一緒に考えていくという場が出来たことはよかった。 (佐々木先生より)

一斉にドリルでひらがなを教えている園もあるが、小学校で習うことを先取りすることはあまり意味がない。間違えて覚えてしまうと修正が難しい。 (永倉先生より)

静岡県 杉田幼稚園 小林先生

Q.うちの地域でも幼保小の連携をしていきたいと考えているが、市があまり積極的でない。園から直接小学校に連絡したこともあったが、カリキュラム上、時間をとることが難しいとの返事が来た。幼児教育について小学校に伝えていかなければならないと思っているが、どんな方法があるか。

A.学校単位でのやり取りだと、校長先生が代わると引き継ぎが上手くいかなかったりすることもある。掛川市の場合は教育委員会が主になっているので、全体がその動きの中に入っていった。幼児教育

を知ってもらうのは公開保育がよいと思うが、まずは教員同士が顔を突き合わせてざっくばらんに話せるようになり、知ってもらうことが大切。学園化構想や未来学会もすぐに出来たのではなく、関係者同士が何度も会って話し合いを重ねてきたことで実現した。いろいろなところでコミュニケーションをとることから始めていくしかないのではないか。 (佐々木先生より)

《グループディスカッション・グループ発表》

1 2 グループに分かれて (1 グループ 6 人ずつ) 以下の項目について話し合った。

① 各園の接続・連携の現状について

- ・それぞれの園、地域での取り組み方は様々ではあるが、ほとんどの園で進学先の小学校との連絡会や交流 (小学校見学や行事への参加等) が行なわれており、小学校について知ることのできる機会となっている。
- ・連絡会を通して、気になる子についての対応の仕方等を伝え、話し合う場がある。
- ・小学生が園にいつでも遊びに来られるような環境づくりをしている園もあった。また、小学校1年生の担任の先生が子どもたちの様子を見に来園され、子どもたちの現状を把握していかれる地域もある。

(課題)

- ・幼稚園や保育園で目指す子どもの姿が違うこともあり、幼小の連携はとれていても、幼保の連携を図っていくのは難しい部分もある。
- ・子どもの情報共有をしたにも関わらず、小学校の先生全体に伝わっていないことがある。
- ・小学校側のねらいや教育要領など、知らないまま形だけで進んでいるところがあるので、互いに知ることが大事だ。
- ・進学先の多い園では、小学校により連携協力の差が大きいことがわかった。

② 幼児期の終わりまでに育ってほしい「10の姿」についての各園での取り組み方

- ・園全体で話し合いを重ね、共通理解していくことが大切である。
- ・子ども自身が考えて生活できるような教師の関わり方を考えたり、保育の見直しをしたりする話し合いの機会をもつ。
- ・活動を組み立てたり、ねらいを考えたりするときに、「10の姿」を踏まえて、参考にしている。
- ・園内研修 (公開保育やレポート等) で活用している園もあった。

(課題)

- ・カリキュラムの見直しを考えてはいるが、なかなか進んでいないことが現状である。
- ・行事の見直しを計っても、園の方針と現場の思いが合わずに困惑することもある。

《助言者 永倉先生によるまとめ》

○平成 29 年改訂の教育要領・指針が示すもの

1. 幼児期の施設 (幼稚園・保育園・こども園) での教育 (保育) 内容の共通化
2. 子どもの発達の連続性を重視 (幼児期の教育からその後の教育への接続)

～資質・能力の育ちをつなげる～

○幼児教育と小学校以上の教育の違い

- ・ 幼保の教育は「方向目標」～学びの基礎を培う～
5領域を元に、「心情・意欲・態度」の育成をねらいとする
- ・ 小学校以上の教育は「到達目標」～身に付けさせる～
教科を元に、基礎的な教育を施すことが目的である義務教育

※幼児教育と学校教育の目指すものは同じようで違っていてもいる。発達の連続性を考え、接続が円滑につながっていくようにすることが大切。そのためには、子どもを中心に据えた教育の見直しをしながら、育つ姿をつなげる教育課程を作成していくことが必要である。

○接続期をどのようにデザインするか

- ・ 接続期の段差はあってよいのだが、子どもの育ちをつなげていくためには、その段差を低くしてどのように生かしていくか考えたい。そのためには子ども一人一人の育つ姿を元にして幼・保・小等の保育者・教員同士の互いの保育・教育についての語り合いによる教育観・教育方法の磨き合いをしていくことが大切である。
- ・ 子ども同士の交流活動や教員同士の保育・授業参観、共同研究や共同研修を通して情報の共有を図り互いの教育の違いを知ることが必要である。特に子ども同士の交流活動では「よそいき」ではなく「普段着」の交流が出来るようにしていくとよい。楽しくできたから成功ではなく、失敗した時に「なぜ上手くいかなかったんだろう。」と教師も子どもと一緒に考えていくことで、互いの理解を深めるきっかけになるのでは。

○新しい見方（フレーム）の再構築

- ・ 幼児教育は子どもを生々の文脈の中で捉える視点がある一方で、評価がひとりよがりになりがちであったり安易に言葉で捉える危険性があったりする。また、活動はあっても“遊び”になっていないこともある。学校教育は教科ごとの能力の育ちを評価し、育ちを促すよさがあるが、生活全体の中で育つ子どもという見方が欠如していたり、教科にとらわれて真の学びを見失ったりする危険性がある。多様な場の実践者が主体となって、外部の専門家と協議しながら進めていくことにより新しい見方が再構築されていく。

○段差を“苦勞”ではなく“憧れ”に変える

幼稚園で身に付けさせたいこと

- ・ 今の自分への自信・信頼（有能感）・「今できている」より「やればきっとできる」
- ・ 「学ぶ」ことは楽しい！という思い
→年齢以上のことをやらせすぎると、肝心のこれらの思いが育たないこともある。

○これからの保育に求められるもの

「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」（学習指導要領より）

- ・ 幼児期の対話的な遊びがあつて、言葉による対話的な学びにつながっていく。子どもが自分から興味をもって始めたことを、大人がやりとりの中で共に先を作っていく。予定調和的でなく、や

りとりの中でその子の育ちを読み取りながら関わっていくことが大切。まさに幼児教育の本質であり、そのためには「育ちを見る力」が必要である。

○幼稚園教育は、小学校教育の準備が目的ではない

「幼児期にふさわしい生活」の中で「発達に必要な体験」を得ることの積み重ねが、様々な「芽生えを培う」ことにつながっていく。年齢にふさわしい経験とは？今年の子どもに合った体験とは？それぞれの園や地域が自由に創意工夫して欲しい。

○子どもは未来からの留学生

それぞれの教育の専門性とは何かを、それぞれの場で探求していくことが求められる。自分の教育を見直す他の視点をもつためにも、小学校との『子どもを真ん中に置いた連携』の構築を図っていききたい。